

第1回 京都会館の建物価値継承に係る検討委員会 摘録

□ 日 時：平成23年10月4日（火） 午後4時～午後6時35分まで

□ 場 所：職員会館かもがわ 大会議室

□ 出席委員（敬称略）

委員長

おかざき しげゆき 岡崎 甚幸 武庫川女子大学建築学科教授，京都大学名誉教授

副委員長

いしだ じゅんいちろう 石田 潤一郎 京都工芸繊維大学教授（日本建築学会推薦）

委員（五十音順）

えとう てるお 衛藤 照夫 社団法人京都府建築士会会長

さわべ よしのぶ 澤邊 吉信 岡崎自治連合会会長

どうげ しゅんたろう 道家 駿太郎 社団法人日本建築家協会近畿支部京都会会長

なかがわ おさむ 中川 理 京都工芸繊維大学教授（日本建築学会推薦）

はしもと いさお 橋本 功 株式会社前川建築設計事務所所長（現京都会館を設計した事務所の代表者）

□ 検討委員会の概要

1 開会

京都市挨拶（平竹文化市民局文化芸術担当局長）

- ・ 委員の先生方におかれては、大変ご多忙の中、本日お集まりいただき、又委員に御就任いただき誠にありがとうございます。
- ・ 私も京都会館に関わる仕事をするようになり5年目を迎えたが、その間、色々過去の経過を見ていると、京都会館については今まで何度も再整備や改修のプランが検討されている。
- ・ しかし、それが実現することがなかったのは、色々な要素があると思うが、非常に価値の高い建物であるということ、それと事業費が莫大に掛かるという2点ではないかと推察している。そういった意味で、本日ここに第1回の「京都会館の建物価値継承に係る検討委員会」を開くことができたことは、感無量である。
- ・ 私が京都会館に関わる仕事に携わるようになってからも、一時は、京都会館はこのまま使えるところまで使い、いずれ用途廃止して解体ということが現実味を帯びていた時期があった。
そうした中で、京都市の職員の中にも京都会館を大事にしたいと思っている者がたくさんおり、そういった者たちの大変な努力の中で予算を獲得し、色々な企画、構想、計画を練って参ったという経過がある。
- ・ それにも増して、ローム株式会社からネーミングライツの取得という形で支援をいただけることもあって、今回、こうして再整備をし、後世に残していくことに至ったということである。
- ・ 本年の6月には、色々音響や舞台面で課題の多い第一ホールは一旦取り壊して建て直す、

第二ホールや会議場棟については、現在の建物を活かしながら改修を進めていくという方向で基本計画をまとめたところである。

そういった方向で、これから4回にわたって議論をいただくことになるが、何とぞよろしくお願ひ申し上げます。

- ・ 私が知る限り、50年前、当時の高山義三市長が前川國男先生と青少年育成の道場をつくるという志で京都会館をつくられた。

京都会館は、やはり時代の波の中、現在では京都で一番規模が大きいホールという、単にそれだけの位置付けでしかなくなっており、その京都会館を今回再生することによって、開館当時の輝きを超える輝きの青少年の道場として、これからの時代はやはり世界を視野に入れた青少年の道場という、京都会館から世界に羽ばたいていく、そういったアーティストの活躍の場として再生を図って参りたい。

そういった意味で、今回の京都会館の再整備は、現代的な意味で前川先生の仕事在完成させるものではないかという風に考えている。

- ・ これから半年余り、4回ほど委員会の開催を予定している。大変お忙しいところ恐縮ではあるが、是非、京都会館の再整備のため、先生方のお知恵を拝借致したい。
何とぞよろしくお願ひ申し上げます。

2 資料確認及び委員の紹介

3 事務局紹介

4 基本設計受託者紹介

5 委員長及び副委員長選任

- ・ 互選により、岡崎委員を委員長に選出。委員長指名により、石田委員が副委員長に決定

岡崎委員長挨拶

京都会館は私が京都大学の建築学科に入って1年か2年になった時にでき、そのころ設計演習をやると、これによく似た案がいっぱいつくられたのを思い出した。

また、京大の教官時代、疏水沿いに熊野の職員宿舎があり、そこに長く住んでおり、この辺りは大変懐かしいところである。

精一杯頑張っていきたいので、よろしく御協力をお願いする。

石田副委員長挨拶

精一杯努めるので、よろしくお願ひする。

事務局（会議の公開について説明）

本日の会議は、京都市市民参加推進条例に基づき公開しており、傍聴を認めている。

また、議事録については、発言者を明記した形で作成し、委員の皆様を確認いただいた後、ホームページ等で公開する。

6 議題

(1) 京都会館再整備基本計画について

- ・ 事務局（尾崎文化市民局文化芸術都市推進室文化芸術企画課京都会館再整備担当課長）から説明

(2) 本委員会の進め方、開催予定について

事務局（平家都市計画局公共建築部長）

- ・ 当検討委員会は、設置要綱にあるように、本市が本年6月に決定した基本計画に基づき、京都会館再整備の基本設計を進めるに当たり、京都会館の建物価値を検証し、次代に継承していくため、建て替えを行う第一ホールをはじめとする外観デザイン等について検討を行っていただくものである。
- ・ 基本設計の期間については、現在、市会において予算の繰越措置を御審議いただいているが、市会の承認を受けた際には来年5月末までの期間を予定しており、当検討委員会については、今年度内、来年3月までに4回の開催を予定している。
- ・ 本日、第1回目の会議においては、継承すべき京都会館の建物価値及び今後の基本設計に当たって配慮、検討すべき点について議論いただきたいと考えている。
- ・ 11月中旬頃の第2回目の会議においては、1回目の議論を基に、京都会館の建物価値及び基本設計に当たって配慮、検討すべき点についての議論を深め、来年1月中旬頃の第3回目の会議においては、前2回の議論を踏まえ、設計事務所が作成した外観デザインのイメージ案（複数案）を検討し、案の絞り込みを行うとともに、課題を整理し、具体的な改善点を検討していただきたいと考えている。
来年2月から3月頃の第4回目の会議においては、3回目の議論を踏まえて外観デザインのイメージの方向性を確定いただきたいと考えている。

岡崎委員長

それでは、意見交換に入る前に、本日は、冒頭に事務局から紹介があったように、京都会館再整備の基本設計業務受託者の香山壽夫（こうやま ひさお）代表取締役にも御出席をいただいている。基本設計者として一言、御挨拶をお願いしたい。よろしく願います。

(3) 香山壽夫建築研究所所長挨拶

- ・ 京都会館は公共施設として、京都市民に愛されてきたものであり、また建築作品としても、日本に大きな影響を与えてきた優れた近代建築であり、その建物の保存再生の設計者に指名されたことは大変光栄であるとともに、大変大きな責任を感じている。
- ・ 私は、改めて言うまでもなく、「建築芸術は生きて使われてこそ意味のある芸術作品である」と考えているので、保存再生という仕事は言ってみれば、過去と現在が未来に向かって

対話していく仕事だと受け取っている。私が知る限り、これまでのどのような保存再生の仕事よりも大きい仕事だと私は思っている。

- ・ 委員の先生方をはじめ、多くの方のお力をいただきながら、是非、この大役を全力を尽くしてやり遂げたいと思っている。何とぞよろしく願いたい。

(4) 各委員の自由意見

岡崎委員長

- ・ 本日は第1回目の会議でもあるので、委員の皆様からそれぞれ御意見をお伺いし、意見交換をしてみたい。
- ・ 今後、京都会館再整備の基本設計を進めていくに当たって、まず一つは、継承すべき京都会館の建物価値をどのように考えるか、また、もう一つは基本設計に当たって配慮、あるいは検討すべき点、特に第一ホールの外観デザインの考え方について、皆様の忌憚のない御意見をいただきたい。
- ・ まずは各委員から一通り、順に御意見をいただいて、その後に意見交換の時間を取らせていただくこととする。

橋本委員

- ・ 本来、私がここにいるというのは非常に微妙であって、私の発言が前川事務所の立場としての意見なのか、私個人の意見なのかは微妙だが、一緒に考えていただいて結構であると覚悟を決めて、今日、参加している。
- ・ 京都会館については、竣工後、幾つか問題があって、第一ホールに関しては、事務所の先輩に聞くと、建設途中から急にコンサートホールにしてほしいというような意見があったとのことである。
すなわち、設計の初期の段階ではコンサートホールというイメージではなく、むしろ会議場とか、そういうイメージで設計が進められたという経緯を先輩から聞いた。
- ・ その後、音響改善のための改修などを前川事務所で行ったが、当時、京都大学の先生にアドバイスをしていただいた。結果、そのデータは、今、事務所にはないのだが、うまくいったという方と、前の方が良かったという方がいたという話を聞いていた。実は、そのことがずっと私の中で気がかりであった。
- ・ 私自身、幾つかのホールを設計しており、かつ、幾つかの改修工事に携わっている。
今は東京都美術館の改修工事に関わっているが、企画展示室が小さすぎるということで、企画棟を全部解体し、内部に大きなボリュームを確保したものをつくるが、外観はほとんど変わらないという形で進めていたり、2階のレストランがこれから大事だということで、既存の屋上の上にもう一つレストランをつくってレストランの充実を図るといったことをやっている。
- ・ 一方、東京文化会館の大改修を平成9年に行ったが、それは主に外観はほとんどいじらず、楽屋廻りなどの内部はガラッと変えて整備・改修し、そしていったん既存のフライズの頭をすべて取り払い、舞台機構（音響反射板）を奈落部分に収納するという大掛かりな改修をや

ったが、撤去したフライズを新たにつくり直し、外観上はどこを改修したか分からないというような改修を行った。

- また、神奈川県立音楽堂は1954年にできたが、いわゆる耐震改修ということで、外部廻りに補強ブレースを入れるという提案を神奈川県から出されたが、外観上問題があると思ひ、我々は客席とホワイエの廻りの壁を厚くすることで補強をし、音響のスペースを閉じ込めるという方法で対応しようと思った。これも外観は変わっていない。
- さて、京都会館に関して言えば、私自身が気になっているのは、ホール設計に携わる技術者として私が言うの問題になるかもしれないが、非常に演奏家泣かせのホールであるという印象を持っている。
- 問題点を幾つか実際に聞いているが、ホールの中で音が上を廻ってしまう状況がある。また、いわゆるエンドステージというか、舞台上部空間が狭い中で、舞台の吊り込みには、皆さん50年間随分御苦労なさって、上手に運営なさっているという印象がある。
- 今後、京都会館が生きていくために、運営面から見ると、いわゆる多目的ホールと称されるフライズを持ったホールというのは、色々な目的に使えるという意味では、現状の舞台運営の使い方、あるいは演奏者の使い方等にとっては恐らく好転するだろう、という感じがある。

その点でいえば、私自身、香山先生がおっしゃったように、建物というのは、保存され、しかも50年経って時代性を持って、地域になじむのと同時に上手に使われてこそ価値があるという考え方を持っている。

- そういう意味では第一ホールを変換するという案に対しては、非常に新しい事例になるという期待感がある。しかし、同時に、それが故にボリュームが変わることにおける京都会館の景観という問題はどうなるのか、それが悩ましいところである。
- 疏水側から見る景色、正面から見る景色、あるいは岡崎地区全体の中での、いわゆる、今までは底に囲まれて、大きな伽藍を構成している上に、飛び出していた部分のボリュームがものすごく大きくなってしまふ辺りについて、今後どのようなデザインのイメージを進めていくか、それが一つ香山先生に頑張っていたいただきたい点である。
- あと、前川の建物というのは、人の動き、動線、流れ、これが非常に微妙である。

エントランスから抜けて中庭に入って、ぐるっと見回してもう一回振り返って建物の存在感と自分の存在を見るという、この内部空間の流れの妙味が京都会館を開放的に、また豊かにしている原点であるように思う。

この辺りを新しい基本設計の中でぜひ生かしていただきたい。

前川の建物は外観ばかりではなく、内部空間の動きとそこへの色々な広がりにつながり、そして素材の扱いに特徴がある。

香山先生は私が尊敬している建築家の一人で、先生が設計されたホールを私自身見ており、音楽も体験しており、安心しているが、その辺りを上手に、前川イズムというものを是非実現していただきたい。私自身、立場上できることは色々御協力させていただきたいと思っている。

- ただし、景観の問題など根源的な問題を含めて、ハードな側面だけではなく、京都にとつ

てあるべき京都会館とは何かという思いも込めて、これから皆さんとともに検討していきたいと考えている。

中川委員

- ・ 本日、紹介いただいた際に、日本建築学会からの推薦と紹介されたが、その点について簡単に説明をさせていただく。

京都会館は日本建築学会賞を受賞した、建築学会としても非常に評価してきた建物である。

日本建築学会は会員数が3万2千人ほどおり、日本の建築を唯一代表する非常に大きな学会である。京都会館の整備計画が示された後、建築学会としては是非、学会が評価してきた建物を大切に使用していただきたいと学会長名で保存要望書を提出したが、それに対して京都市から、再整備に当たって建築価値を継承してくることを考えており、なおかつ建築学会の要望書には、学会として協力できることがあれば協力する旨を記載されていることから、京都市から今回のような価値を維持するための検討委員会を立ち上げるため、建築学会から委員を推薦してほしいとの申し出があった。

それを受けて建築学会で担当している建築歴史意匠委員会で議論をし、市の申出に対して委員を推薦することを決定した結果、私と石田先生が推薦されることになった。

こういった経緯があり、私と石田先生は、こういった価値があるかを発言する際には少し微妙な点があり、建築学会の推選ではあるが、学会で議論をしたのは歴史意匠委員会であり、主に建築の歴史を研究されている先生方を中心として議論をしてきたことから、近代建築史の研究者として、こういったことができるかということ発言させていただきたいと考えている。

- ・ 近代建築というのは、新聞にも書いたが、これまでの明治や大正の様式建築の保存とは根本的に異なり、モダニズム建築の何を保存するかについては価値が全然違ってくる。古い建物の場合、例えば象徴する何かの様式がある場合、それが大きな価値を占めることになるが、モダニズム建築の場合、ものをつくるというのではなく、ものによって囲まれた空間をつくるということが大切で、人の動きというものがうまくデザインされている。

そういった空間の素晴らしさがモダニズム建築の価値ということでいうと、例えば、京都会館をモダニズム建築という意味で見たときの最大の魅力は恐らく中庭だと思うが、中庭の空間の素晴らしさをいかに継承していくかということが、大きなポイントになるのではないかと個人的に思っている。

- ・ モダニズム建築は機能的につくる、与えられた機能をうまくまとめるためにつくられるのであるが、その機能が時代によって求められるものが変わった時に、今回も具体的にいえば第一ホールの収容人数や、ホールの機能をより良く今の時代に合うように変えるとすると、元々持っていた機能で形成されていた空間を、新たな機能に変えることになり、相当矛盾を起してくるということは確かであると考えている。

そのことをどうやって解決していくかということ、これは大変難しい問題であると思う。

- ・ これまでの近代建築の保存・改修に比べ、今回のケースは、恐らく日本で一番最初に直面する大変困難な改修であると考えている。

ただ、それはやはり、どこかでチャレンジしていかないといけないと思うし、そういう意味で京都会館の改修案を検討するということは、私にとっても大変重い場に出ていると思うと同時に使命感も感じている。

道家委員

- ・ 日本建築家協会近畿支部京都会から参加している。
- ・ 今回の委員になる前に、京都の建築関係4団体（建築士会、事務所協会、建築家協会及び設監協会）と京都市とで協議をさせていただいた。その後、この問題に関する要望を協議した。
- ・ 景観条例がつくられた後、景観デザイン協議会が設置され、4団体で今まで景観政策の推進と適正な運用を数年間議論してきた。

この4団体に対して、今回の検討委員会への委員の参加要請が、当初1名と言われたことに対し、非常に景観制度に大きな影響を与える今回の事業に対して1名の参加では少ないので、2名が参加できるよう要望した結果、4団体から2名の委員が参加となり、建築士会と建築家協会から参加することになった。

- ・ 私も設計をしているが、団体としての、特に京都全体の建築家の団体の意見をベースとしながら委員会に臨んでいきたいと考えている。

個人的な考えは多々あるが、なるべくそれは控えていきたい。

- ・ 今日は最初の話であるので、まず、一番大きな問題は、50年後、100年後の京都を考えるということで、時を超え、光り輝く京都の精神で新景観条例ができたこととの関係である。

新景観政策に対して、我々の団体は真っ先に賛成であり、推進していくべきと他団体に先駆けて賛成の声を上げてきた。その後、具体的な規制内容についての意見はあるが、少なくとも高さをコントロールすることには賛成であるということでスタートした。

そういう立場から申し上げると、京都会館の場所は、高さは本来15mに規定されている。

ところが、突然、第一ホールが建て替えとされ、高さ15mが適用されているところに、いきなり地区計画で31mとすようになった。

公共施設で、この地域はそういった役割を持っているということは、市民合意とかそういった話ではなく、突然出てきた手続的な点、この問題について非常に懸念している。

というのは、民間の業者も含めて、今、景観政策による高度地区を変えさせようとしている、うごめいているマグマのようなものがあり、それに対して公共が率先し、必要だったら31mとする手続を地区計画という都市計画手法が使われるとなれば、それだったら自分のところも高度地区について見直せという話が強くなるのではないかと、これについては慎重に扱うべきであるというのが団体の意見としてある。

- ・ 今まで設計者として高さ制限や歴史的地区であれば勾配屋根を設けるなど、必死に何とかする努力をしてきた。クライアントに対しても京都の将来を考えて、みんなで尊重していこうと説得を続けてきた者からすると今回の経過は乱暴であると思う。
- ・ 高さだけではなく、景観制度の根幹では、周辺から見たときの圧迫感への配慮や、勾配屋

根で全部作るということが基準になっている。

京都会館のようなフラットな建物は、今後、景観制度が守られ続けている限り、近代建築として建築することはほとんど不可能である。

- ・ 西側から今の写真を見ても、かなりのボリュームが西側に突出している。これも市民感情からすると非常にいきすぎではないかと思う。

造形的にも京都市が決めた勾配屋根とする努力をするべきではないかと思う。

基本計画の中で、フライタワーのぶどう棚まで27mとされている。これはプロセニウムの必要な高さを決めれば高さは自動的に決まってくるが、これは前提条件の問題であると思うので、この辺りの精査をするべきである。

- ・ 必要だから作るというだけでなく、我々が設計している場合には、必要だから作りたいが景観制度により駄目となるので前提条件をどうやってクリアするか、クライアントに対しても譲歩をしてもらうようにしている。

必要だから問答無用というような態度はどうかと思っている。

- ・ 他にもいくつかあるが、建築の高さ制限を絶対に守らなければならないという立場ではなく、市民のために充実したものにしなければいけないということは重々分かっており、再整備による京都会館の質を高いものにする点についてはやぶさかではないが、京都の景観制度の精神にあったような形で対応をしていただきたいと思う。
- ・ 建築の価値を継承していくために具体的なものについては、後に発言させていただく。

衛藤委員

- ・ 私は建築士会の会長をしているが、道家委員から紹介いただいたように、建築関係の4団体で協議をしており、私も4団体としての意見をまずはメインに据え、個人的な意見はその中に混ぜながら議論を進めていきたいと考えている。
- ・ 先ほど道家委員もおっしゃった、4団体としての意見が取りまとめられたものを紹介しようと思っていたが、道家委員から説明していただいた。

私もまったく同意見であり、「光り輝く京都」の精神にのっとって進めたいということは、景観デザイン協議会に協力した関係上、染み付いている。4団体の皆も同じであろう。

高さの問題であるが、本当に31mまで必要なのかということは、十二分に慎重に検討し、市民にもきっちり説明ができるような段階まで考えて参りたいと強く思っている。

- ・ 京都会館は、私も大学の建築学科に入ってすぐ、建物のスケッチやパースを描いており、色々な思い出のある建物である。

建物は放っておけば当然機能は落ちてくるし、老朽化し耐震改修の問題も起こってくる。これを単に保存するのではなく、改修して使い続けていく、しかも建物の持つ価値を受け継げる方法での方法を念頭に再整備を考え、実施するという枠組みが組まれたことにはワクワクしており、大いに期待している。

ただし、そこに横たわる大きな問題が数多くあるということも十分に分かっており、その辺りを皆さんと考えていきたいし、この検討委員会に招かれたことは非常にうれしいことである。しかし、この委員会形骸化し、ガス抜き会の会になってはならないと考えている。

- ・ それは、つまりこの検討委員会で語られていることが、基本設計にいかされることであると思う。

また、当初検討委員会には建築関係4団体から1名の参加要請であったが、2名参加としていただいたことには感謝している。そのような形で自分のできる限り意見を出していきたいと考えている。

澤邊委員

建築の専門家の方々の中で、私自身、場違いではないかと思う点もあるが、他の委員の皆さんと違う点のは、生まれてから70年、京都会館のある岡崎の地で暮らし続けている点である。良いところも悪いところも身にしみている。

- ・ 京都会館が建てられた当時、私は大学生であったが、素晴らしいものが建ったと思った。建てられた当時は誰が設計者か、素晴らしい建築家かどうかというようなことは興味がなかった。今回、御意見を聴かせていただき、素晴らしい建築だという評価を改めて感じたところである。

しかし、周辺では完成してから50年程度で「素晴らしい」といえる建物は少ない。

既に400年、500年という建物があり、平安神宮ですら100年強である。

まだ50年しか経っていない中でこれほどの評価を受けているが、これから先50年、100年、200年先のことを考えたとき、今、色々なことを言うのが正しいのかどうかは分からない。

- ・ 建てられた当時は、音楽をはじめとして、あらゆる催しが京都会館で行われていた。京都会館に音楽を聴きに行くことが誇りであって、色々な人が京都会館に来るのは良いものだなと感じていた。しかし、最近ほとんど使う人がない。理由は機能低下のためであり、機能を追い求めていくのか、前川先生の思いを踏襲していくのか、どちらが大事かということ、「建物は使われて値打ちがある」ということであれば、そのために少し頑張ってもらいが必要があり、中途半端なものはつくってもらいたくはない。
- ・ 中途半端なものをつくるくらいであれば、解体して公園にしてほしい。なぜなら、岡崎グラウンドは平面の緑豊かなグラウンドがあり、みんなが遊べたところであった。これがなくなり、かつ、中途半端なものが80億円以上掛けて建てられるのであれば、本当に一から考え直していく方が良いのではないかと、歴史が50年程度ではそう思う。
ヨーロッパ辺りでは、何百年の建物の保存ということもあろうかと思うが、そういったこととは少し違うのではないかと思う。
- ・ 私は建築の専門的なことは分からないが、後世に残るいいものをつくってもらえるようお願いしたい。

石田副委員長

- ・ 中川委員と同じく、日本建築学会からの推薦を受けた立場として発言する。
- ・ 京都会館については日本建築学会から保存要望を出し、その中で京都会館の価値というものを記載している。

今回、基本計画がまとめられ、建物価値継承に関して学会に対して協力依頼を求めてこられたとき、京都市が再整備基本計画にそのことを記載し、保存要望書に記載した京都会館の価値を継承するために議論するという、京都市の努力を評価し、今回の委員会への参加に至った。

- 基本計画の本冊については、多岐にわたり細かくリジットに記載されている。
基本計画に載っている中庭のデザインで、京都会館の価値が継承されるのかどうか、といったこともあると思う。
- 個人的な思いとしては、京都会館の第一ホールの南側から北側、平安神宮に抜ける透明感が一番好きな点である。舞台を下げてくることになる、その点が変わってくる。
- 基本計画の実現が前提とされているが、この委員会が設計内容を追認していく場とするのではなく、根本的な議論の場としたい。

岡崎委員長

- この京都会館という建物は、昭和35年にコンペで出来上がったもの。コンペの審査員に私の先生の先生である森田慶一先生がおられた。
ギリシャ時代の影響が濃いローマ時代の初め頃にウィトルウィウスという建築家がいた。この先生は、ギリシャ語を勉強してウィトルウィウスの研究をされた。
ウィトルウィウスの著書には建築の3大属性が、強（構造）と用（機能）と美（デザイン）であるとされている。それは揺るがない真実であり、建築の考え方にはポストモダンなど色々のものがあるが、基本的な建築の骨組みである。ここからは私の考え方であるが、強と用と美というのはこの順番で下から積み上げられたレンガのようなもの。
強がなくなると用はない。姉歯問題は典型的なもの。
しっかりした強の上に用を積む、強と用がなかったら美はない。強と用だけであれば、これは倉庫のようなもので「建築」ではない。こういう関係にあると思っている。
- 私自身、京都大学を定年退官し、若い人と一緒に武庫川女子大学で建築学科をつくらなかつた。私は日本の建築教育は欧米とずいぶん違うと感じており、旧甲子園ホテルを舞台に武庫川女子大で欧米型教育の実現を目指している。
甲子園ホテルはフランクロイド・ライトとともに帝国ホテルを作り上げてきた遠藤新という人が関西にも同じようなものを作ろうとしたもの。
甲子園ホテルは戦後、進駐軍の将校宿舎として接収され、その後大蔵省の管理となっていたが、武庫川女子大学が買い取り、長く用途が決まっていなかったものの、建築学科で使おうとなった。
かなり改造はしたが、当時からホテルの客室などはほとんどなく、これは進駐軍が駐留した際に取り払われたものであり、耐震改修もしたが外観は一切触っていない。
だが、ものすごく多くの人が見学に来る。近くに山邑邸というライトの建物があり、愛知にも明治村があるため、東京からも人が来る。
- 強・用・美、強がなければ用がない、強と用がなければ美がない、しかし、美がなければ建築ではないことを、そこで実感している。

- ・ 色々な先生にお世話になり、以前から東京駅前の日本工業倶楽部で近代建築の講演会をしている。先だつての土曜日も、三菱一号館に関する講演と見学会をした。ものすごい人が来て、一部参加を断ったほどである。

なぜ、こんなに人が来るのか、三菱一号館などは明治時代の様式建築であり、人によっては下手な様式だという人もいるが、それを取り囲む近代建築よりもすばらしい。

これは何故か、最近考えさせられる。

- ・ 先ほど、50年間で大騒ぎするののかという意見もあったが、建築というのは50年ではなく、更に永く使われるものと思うが、最近の急激な様々な変化を考えたとき、人類がこれまで経験したことのない状況に立たされているように思う。

これまでの50年と、これからの10年、5年などは尺度が違うのではないかとも思う。

500年長生きしたものには勝てないと思うが、建物の価値をどのようなスパンで考えるのか、今後の議論に委ねたいと思う。

(5) 意見交換

衛藤委員

- ・ 委員会の進め方に関係するが、J I A（社団法人日本建築家協会）等では会員から対案が出されている。また、他にも建築4団体の中には検討されている方もいる。建築士会の中でも対案の議論をしている。
- ・ 事務局からの説明では、今回と第2回委員会で検討委員会の意見を述べることになっている。第3回委員会から、香山先生の案を我々が拝見し、意見を述べるという段取りになっている。ということは、我々としてはこの2回の委員会で、ある程度のスタディを進化させていく必要があるのかとも思う。検討の進め方について御意見をお伺いしたい。

岡崎委員長

- ・ その点について、もう少し1～4回目までの予定を事務局から説明願いたい。

事務局（平家都市計画局公共建築部長）

- ・ 本検討委員会は京都会館の建物価値をいかに検討していくかというものであり、あくまでも前提となるのは京都市の策定した再整備基本計画になるが、本日、委員の皆様から基本設計に当たって配慮すべき事項、あるいは検討すべき点について、何点か御意見をいただいたと思う。
- ・ 市として、今回の委員会での論点を整理し、更に議論が深まるように、事務局で準備する資料を工夫しながら作成し、御説明を重ねながら議論を深め、基本設計を担当する香山先生に案をつくっていただきたいと考えている。

衛藤委員

- ・ 今、既に建築士会で議論している中で、建築形状について頼りになる資料は模型写真ぐらいであり、それを見て、庇からフライタワーがこんなにも突出するのはおかしいといった意

見が出ている。正確な資料がないので、予断で話をしてしまうなど悪循環を生んでいるように思う。

- ・ 例えば、市で考えている精度の高い資料を提供いただくなどして議論を深めていく方が良いのではないかと思う。そのような資料をいただくことは可能か。

事務局（平家都市計画局公共建築部長）

- ・ どういう視点でデザインしていくか、どういう方向で建物価値を継承していくべきか、という点については、この委員会で議論をいただき、検討課題のようなものをいただいて我々で資料を準備したいと考えている。
- ・ 例えば、「こういった観点に基づいた、こういう資料を準備してもらいたい」という様に具体的に指示や御意見をいただければ、できる範囲で資料を準備し、次回の検討委員会に臨みたいというのが基本的な考えである。

岡崎委員長

- ・ 衛藤委員がおっしゃっている内容で、具体的な資料というのはどのようなものを指すのか。

衛藤委員

- ・ 基本構想にあるものより精度の高い図面であるが、市にはどのような資料があるのか。

事務局（平家都市計画局公共建築部長）

- ・ 詳細なビジュアル資料などはこれから検討していく。

岡崎委員長

- ・ 例えば、舞台部分の具体的な規模や、客席の人数は再整備基本計画の中で決まっている。この他にどのようなことが決まっているのか。現状の図面は本日の資料とされているが。
- ・ 例えば、次回、衛藤委員がスケッチなどを持ってこられて、それに対して議論を進めるといったようなことは考えられるのか。

事務局（本田都市計画局建築技術担当局長）

- ・ 先ほどから色々な意見を委員の皆様から頂き、最終的には大きな成果を上げることができると期待感を持ちながら聞かせていただいている。
- ・ 京都市としても京都会館に対する我々なりのデザインの優れた点というものは考えを持っている。ただ、そういった我々の解釈を御説明する前に、今回の委員会で幅広い御意見をまとめていただきたいと考えているので、京都会館の持っている優れた点や、基本設計に向けて考えるべき視点について伺ったうえで、次回それを咀嚼して、議論を深めるためのイメージが必要であれば、努力して作成したいと考えている。
- ・ 各委員の皆様から、もう少し御意見をいただいて、配慮すべき点などをお伺い出来ればと考えている。

中川委員

- ・ 検討委員会のスケジュールに少し違和感がある。建物の価値や基本設計に当たって配慮すべき点はいくらでもある。
- ・ これまで私自身、いくつかの建物の保存委員会に参加してきたが、改修案を示してもらい、配慮すべき点などを指摘するなどキャッチボールをするケースが多い。
今のスケジュールではキャッチボールする機会が3、4回目の2回しかない。
たたき台を示されないと優先順位もつけにくい。

事務局（平家都市計画局公共建築部長）

- ・ 資料のレベルにもよるが、現時点で可能な限り議論が深まるような資料づくりを考えていきたい。

岡崎委員長

- ・ 香山先生にしてもプランをしっかりと考えていきたいとお考えもあると思う。
今回は非常に難しい設計になると思うので、資料については市と香山先生とで検討していただきたい。

事務局（本田都市計画局建築技術担当局長）

- ・ 事務局としても検討していきたい。そのためにも、もう少し具体的なイメージが出るような議論をいただければ幸いである。

橋本委員

- ・ この検討委員会での話は再整備基本計画を前提としているということが原則である。一方で、私の関心ごとは、建築のハードよりも京都市にとってオペラハウスは必要なのかとの思いがある。
そのあたりの情報の入り方だが、昨年日本経済新聞に掲載されたように、打ち上げ花火の様に伝えられた。
あの記事を見た瞬間、あり得ないと思った。
要するに新国立劇場のようなバックヤード、座席、ホワイエの広さなど、本格的なオペラハウスを建てようとする、中庭をつぶすなどとなり、京都会館はつぶれてしまうと感じた。中庭をつぶしたり、バックヤードの搬入設備や袖舞台の問題、舞台の奥行きの問題、高さの問題など、すべて大きくしていかないといけないと考えた。
- ・ 数年前、京都市からの委託事業の中で、京都会館の再生に関する提案を要請された。使いづらいホールであることは分かっているが、バレエやオペラに世界的なレベルを呼ぶのではなく、市民が使えるレベルとするにはどの程度のボリュームを考えればよいかとの話であった。
その上で、客席上部の高さ（現状の高さ）までのフライズと疏水側に向けて壁が庇を超え

ないというような提案をしたことがある。

- ・ 中途半端なホールで、その中で運営をしていくということも我々としては自己矛盾と考えていたが、景観という観点でみると大きな問題であるという思いがある。

ただ、ここで私自身がそれを議論するつもりはないが、オペラという観点でみると今回の再整備基本計画は実にうまくまとめられている。

- ・ 疏水側の庇、いわゆる大屋根の裾が全体の京都会館の水平構成をなし、その中に伽藍の色々な柱等の関係がきっちりと構成されており、アプローチしたときの「抜け」と「見上げ」が京都会館の大きな特徴である。

欄干の庇、手摺の庇、京都会館らしい要素については目につくレベルとして、目線のレベルとして、見える価値として継承していただきたい。

- ・ 第一ホールのホワイエから向こう側がみえる、抜ける、柱が林立している様な風景も継承できると思う。一番大きな問題はフライズの問題であるが、用途という観点から言うと、私自身オペラができる劇場をつくるのであれば、高さは31mにする。

舞台の広さは間口にもよるが、巡回で来る場合、使えないホールに巡回は来ない。

東京文化会館にヨーロッパの高名なオペラが来るときは、その舞台に合わせたセットを組んでくるので、それを運用できない小さなホールは通過する。同規模のフライズと舞台装置を持っていないホールは、プロモーターとしては巡回できないことは分かりきっている。

そこを相手にするレベルであればそれなりの規模をつくらないと中途半端になる。

そこで、オペラまで踏み込んでよいかは分からないが、京都会館を使っていきたいという思いは私自身強くあり、今の第一ホールの使いかたは非常に制作者を悩まし、運営する側にも悩ましいところであり、皆さん頑張っておられているが、50年間御苦労なされたという印象を持っている。それは変えたい。

多目的に変えれば、大きなプロモーターでなくても、そこそこ使える役割分担は京都にはあると思うし、その内容は基本計画で見事に分析されている。

- ・ 第一ホールについて、舞台レベルや搬入の問題を考えて、解体し、舞台レベルを調整し、その容積と大きさを如何に外観としてボリュームを大きく見せないように、しかも内部の空間構成を元のイメージとあまり変えずに「抜けている」という感覚、透明感がありながらも素材がしっかりと伽藍の構成をつくっているといったことが、デザイン力で香山先生が一番苦労なさる所と思うが、香山先生がこれまで設計なさってきたホールを見てみると、きっといい答えが得られると思う。

ただし、多くの市民にとって、あるいは一つの建築の歴史的観点から見ると、新しくすると一つの資産としての価値はなくなる。文化財としての価値はなくなってしまうが、それは50年というスケールで見たレベルの話であり、高々50年である。

- ・ 100年を超えるレベルで見ていけば、京都会館は戦後日本の近代建築のレベルの到達点であると書いている人もいるが、実はまだ京都会館は到達点を先に持っているのではないかと感じた。

そういったスケールで京都会館を未来につなげていくという発想は確かにあり、京都会館が活性化されれば、今回の大きな意義においても取り組んでいけるのではないかと。

ただ、それが建築文化財の歴史的観点から見ればどのようなものなのかということと、一方の局面として修景という問題を大きくクリアする必要がある。

そんなに難しい話ではなく、京都会館の前を歩いた時の目につく感覚、なおかつ疏水から見た穏やかさ、東山を背にして妙にそそり立ってない現在の屋根の形が穏やかな京都らしい風景をつくっている。そこにフライズがお墓の様にそびえたつようでは興ざめだし、その辺りを水平力を生かしながら現在の京都会館が持っている構成力、これを如何に活かしながらフライズのボリュームを抑えていくかが一つのデザインの要素ではないかと考えている。

この点についてはこれから出されるであろうデザインについて、色々喧々諤々していけばよいのではないかと考えている。

- ・ 前提としてオペラの上演の可能性を考えたとき、舞台の奥行きが18mから20m、フライズは例えばプロセニウム高さが最小限の8mであっても、スノコまではその2.5倍の20m必要、スノコまで27mであればスノコの上部を2段で取れば、数値上は31mというオーダーは出てくる。

この辺りの話はこの委員会でも是非の問題、その辺りを反対あるいは保存というレベルで見たとき、私自身、保存というレベルの問題でも色々壊して新しく造っている改修を経験している。

保存と改修については様々な範囲がある。建物によって一つ一つ違う。京都会館にもその範囲はあるはずで、その範囲をうまく見つけていくことがこの委員会の役割である。

石田先生にお聞きしたいが、歴史的にみると形を壊したものは価値がなくなるという観点はどうか考えられるのだろうか。

石田副委員長

- ・ 非常に悩ましい問題である。文化財の保存という点についても常に残すことと新しくすることで得られるもののバランスの問題と考える。

国宝になった赤坂離宮についても、エレベーターが設置され、エアコンが導入されても国宝である。ただ、離宮の階段にスロープは付けず、必要な場合には介助により対応する。

できることとできないことがある。

- ・ 一方で外観が大きく変わるということをどう考えればよいのか、我々としても悩むところである。アンドレア・パラディオが手掛けたバシリカについては、ロマネスク時代の建物に、16世紀にパラディオがバシリカのファサードを新しく取り付けた。

そのように建築が歴史を積み重ねていくことが都市の建築のありようであって、日本の近代建築にも歴史を積み重ねていくことによって常に生き変わっていくことが今後あり得るのではないかという気がする。

オリジナルの形がなくなるということは怖いことだが、それだけで破壊、文化財の価値がなくなるとは必ずしも思わない。

橋本委員

- ・ 今の御意見を聞いて国立西洋美術館の世界遺産登録について思い出した。

色々な関係者から話を聞いていたところ、建築の保存というレベルでいうとオーセンティシティ、正統性という文化庁の考えがあり、これはオリジナル性をいかに残すかである。

デザインの正統性があるか、いわゆる真実性があるか、材料の真実性があるが、工法の真実性があるか、景観の真実性があるかが問題になる。

- ・ 実は、西洋美術館の場合は、周囲の建物がかなり崩れてきており、景観としてのオーセンティシティがないといわれ、また、場合によっては材料のガラスを新しいガラスを使っては駄目という考えもある。

コルビュジェ財団は、補修をする際には18世紀、19世紀のガラスの製法とサッシウを使って復元することが世界遺産たるオーセンティシティという見解をもっていると聞いたことがある。

- ・ 保存という問題を考えるとオーセンティシティの問題とぶつかることになる。

今、私自身が関わっている弘前市の市庁舎については1958年に竣工したのだが、これの改修調査を行っており、市長からはこの庁舎はいずれ歴史的建物にしたいので、耐震工法で改修するにしても廻りのスチールサッシウは変えないでほしいといわれている。

この当時、日本に現在のサッシ廻りのシーリングは広く導入されていない時期であり、これを現在のアルミサッシウにすると建物の歴史性がなくなるので、現在のスチールサッシウのまま改修を進めてほしいという例もあるが、寒くてかなわないので、アルミで気密性を上げてほしいとの要望があることもあり、その上で残していく建物もある。このように保存を考える場合にもレンジの幅は大きくある。

- ・ 京都会館をどのようにしていくかということに基づいて議論を進めていく意味で、根源的な話も大事ではあるが、基本計画の方針にのっとっていく中で保存と改修という問題の間で可能性を探る議論を進めていかないと、10年やっても答えは出ない。

50年ではまだまだ若造という京都会館をどう捉えていくかで何か答えが出てくるのではないかと思うが、どうだろうか。

道家委員

- ・ 保存の問題について、先月ヨーロッパに行っていたのだが、リヨンのオペラハウスはジャン・ヌーベルという建築家のデビュー作であるが、外観はそのまま使うが、内部をくり抜き、上部に巨大なアーチをつくり、それに客席を吊るという工法が用いられており、市民の間で非常に評判がいいと聞いている。

ヨーロッパでは建物の保存・改修時に、古い建物の場合、外観はそのままに、中をそっくり新しくする手法も用いられる。

- ・ 今回の京都会館は基本計画でも外観は基本的に保存するとなっている。また、事務局の説明ではピロティから中庭に抜けての透明感の保存や空間にはかなり配慮されていると思う。基本的に外側を今の形で踏襲していくことについては異論はない。

ただ、リヨンのオペラハウスの様に、その上に大きなものをつくるということが京都において市民的合意が得られるかどうかは懸念するところである。

- ・ ちょっと刺激的なことではあるが、一般市民というか、色々な方々の噂として、「オペラ

ハウスということが最初にあって、ローム株式会社から金を出すからオペラハウスができるようなものにしてほしいと要望が出され、それを受けてオペラができるような舞台とフライタワーが必要になり、そのために高さがどうしても必要になるので、今度の地区計画で京都会館の高さが31mとされた、ゴリ押しだ」ということが噂されている。

この噂を払しょくするような、きっちりとしたことをしないと市民的合意は得られない。

- ・ 高度地区を決めるときの高さというものは、東山等の周辺部は低く、街の中心に行くに従って高くなることを原則として決められている。

これが東山のところで突然31mとなる。これが先ほどの噂で言われているようなことではなくて、純粋に京都会館の機能として必要なものであることをきちんと証明、説明をしていかないと厳しい。一切古いままで機能の制約を大きく受けたまま保存するのではなく、合理的な説明ができ、誰が見ても次の文化財になるということを示していく必要があるという意味で前提条件を精査していくことが求められる。

岡崎委員長

- ・ オーセンシティシティの御専門である中川委員にお聞きしたい。

中川委員

- ・ 最近、既存の建築物をうまく使いこなしていくことに関して、大学での教育が必要でないかと考えている。そういうプログラムを考えているが、2つに整理して考える必要があると思う。
- ・ 一つ目は、オランダでは産業遺産である給水塔をオフィスとして使用した例などがたくさんある。これは新しく使う人間が、古く使われてきたものに新しい価値を与えていくことである。
- ・ 他方、京都会館の場合は違っており、これまで既存の建物が使われてきたことによる価値が非常に大きく、この場合に新しい価値を与えるというよりも、既存の建物の価値を改修によって維持する、あるいはそれ以上のものにしていく、新しいものを付加するということに加え、かつての価値も拾い上げていくことをしていかななくてはならない。

こういった例はあまりない。モダニズム建築の場合は特に例がなく、成功している例は思いつかない、大変難しい取組である。アンチテーゼというか、悪い例はたくさんあるが、これは古い近代建築の価値を理解されていないことが多い。

敷地などの制約があるとは思いますが、往々にして古いものに対比的な表現で新しい価値をつけようとした場合に失敗しているようなケースが多いように感じる。

古い部分の価値を減じてしまうことになっており、これはしてはいけない。

岡崎委員長

- ・ 再整備基本計画を見ていて、京都会館の特徴は水平の一本の線であると書いてあったように思うが、私にとっては違和感がある。

私が京都会館をこれから長く残したいと思うのは、庇があり、その下に影があることだと思う。私は6年間、建築学会の特別研究委員会で京都の都市景観に関わってきた。

- ・ 京都市に景観のマニュアルができ、そこには色々見本が書かれている。
屋根を載せると大体クリアできるというように書かれており、ベランダは柱の内側に入れるとなっている。

これはよくないと後のシンポジウムで発言したが、それが何故おかしいかという、例えば、塔について考えて見てほしい。西洋の塔は、屋根はあっても絶対に庇はない。

城についても日本の城は各階に庇が付いているが、西洋の城は屋根があるだけで、絶対に庇はない。

- ・ 市のマニュアルにある見本の例は京都の建物ではない。きちんと庇を付けるべきと考える。
建て込んだ敷地で庇を付けるのは無理なこともあると思うが、せめて独立して建てられているものには必ず庇を付けるべきと申し上げている。東寺の五重塔は京都の高層建物の原風景である。
- ・ 谷崎潤一郎の「陰翳礼讃」には陰影部分を明るくすることを考えるのが西洋、暗い影の部分を認め、活かしていくのが日本と記されている。この暗い部分をいかにうまく濃淡をつけ、墨絵を描くように描いていくかが日本のデザインの考え方である。

日本の建物はまず屋根があり、屋根の下に広い影ができ、その中の奥の方に部屋をつくる。つまり、立面に影が出来るものが日本の建物であると書かれている。

京都会館はまさにそれに合致するものであり、京都会館の庇は残す若しくは同様のもので再生されるべきだと考えている。

- ・ 内部については、使えなかったら駄目になってしまう。なるべく基本的な部分、京都会館では大きな庇と考えるが、これをしっかりと考えながら、内部はきっちりと使えるように直していかないと維持していけないと感じている。

その時によいものを、どのようなものを持ってくるかは難しいが。例えば、庭石は一つ一つ表情が違い、庭園はそれらを組み合わせ作り上げていくもの。茶室にしても同じ柱を繰り返して使うことはタブーとされている。日本人はこういった表情の違うもの同士をうまく調和させる能力を持ち、さらに、それを楽しむ感性を持ち合わせている。

日本人のデザインの仕方、違うものを持って来て活性化させることがあってもいいと思う。

しかし、やり方次第では万博のようになってしまう。うまくできればもっとよいものをつくることができる。

1600年代の京都の町並みは非常に面白く活気があり、その風景が洛中洛外図に描かれている。

衛藤委員

- ・ 何を残すか、語り尽くされているように思うが、先ほどから色々考え、悩んでいたことを橋本委員は明快に説明されていた。
- ・ 今回は総合力をもって、いいものをどう残していくかを考えていくことになると思う。
総合力とは、建築計画と求める機能のバランスを考えることで、結局、どういうものをつ

くっていくのかということと、そのための手法の幅広い検討の二つである。これらはどちらもありジットに考えると答えは出ないように思う。

西側からの景観は非常に大切であると自分自身考え、強く言いながら、どうしても高さが必要であるとするとき、フライズを少しでも下げるということを考えたり、デザインについて考えていたとき、勾配屋根にできないだろうかなど幅広い検討を尽くすことが必要と思う。

このように総合力をどのように結集するかが大事であると考えている。

- ・ また、美術館の別館は手を加えないと聞いているが、多くの仲間から別館が京都会館とマッチしておらず、また、中庭の広がりやを阻害している、むしろ撤去した方が京都会館の空間構成が活かされるとの意見があり、また、舞台計画の多様性も増すと思う。

岡崎委員長

- ・ 美術館別館はない方がいいということが京都の建築士会の意見なのか。

衛藤委員

- ・ 全体ではなく一部の意見としてある。

澤邊委員

- ・ みんな正しいことをおっしゃっているとは思いますが、何が正しいということもないのではないかと思います。私の思いとしては前川先生がつくられた思いを生かして機能に富んだ建物をつくってもらいたいということ。
- ・ 少しでも手を加えられると、それは文化財ではないということは、文化財の本来の概念ではないと思う。
やはり、思いを反映させながら機能には手を加え、その結果遠い先に文化財になっていくことがいいのではないかと思います。

中川委員

- ・ 京都市の方も含め、改めて言うことではないが、第1回目として何を継承していくかを確認していくには、繰り返しになるが、二条通のピロティは圧倒的な存在である。
- ・ 日本人のコルビュジェ直系の建築家の作品にはいくつもピロティがあるが、京都会館には中庭に誘い込む素晴らしい仕掛けがある。第一ホールの抜けについてもピロティとつながっており、モダニズム建築のひとつの主張である建物が浮いていることでその下に空間をつくることは、先ほども申し上げた価値に加え、岡崎委員長からあった建物の陰影である。こういった魅力は一番押さえておく必要がある。中庭の存在、ピロティの存在、空間の下の部分と影。これらの空間については外せない魅力だと思う。

岡崎委員長

- ・ 衛藤委員から美術館別館は不要でないかという意見があったが、私自身の考えでは、美術館別館はキッチンかもしれないが、あった方がいいと思う。先週土曜日にも三菱一号館に行

ってきたが、高層ビルがあり中庭があり緑があり賑わいがある。

京都会館の中庭には賑わいがなく、緑がない。賑わいを確保するために美術館別館をうまく使えばヨーロッパにはない、三菱一号館にはない賑わいができるのではないかと思っていた。

- ・ 今はあの別館を隠しているような感じではあるが、別館の周辺にはもう少しヒューマンスケールが必要であると思う。美術館別館の廻りの中庭に賑わいがあってもよいのではないかと思う。

道家委員

- ・ 中庭の空間についての言及があったが、先だって京都会館の屋上を見たときに、前川先生も当初は屋上庭園という近代建築の概念を持っておられたようだが、非常に快適な屋上で、そこでは別館の屋根を非常にきれいにみることができた。
- ・ 今の京都会館のホワイエは非常に狭く、天井が低い。しかも吹き抜け部分が小さいだけでなく、そこに斜めに梁が出てきている。空間がもう少し抜けているとあの辺りがすっきりすると思うが、現状では中庭部分にホワイエが出て来ないと解決できないのではないかと思う。

岡崎委員長

- ・ 地球環境の観点では太陽光発電は許容されるのか。付けられないと思われるか。

橋本委員

- ・ 問題はないと考える。太陽光パネルはどう見せていくかを考えることが大事。
- ・ 省エネや節電の問題などであり、照明については今後LEDに切り替わり、美術館ではLEDの方が効果的で、熱の発生量が少ないなど作品にとって優しい。ここ2、3年の進歩はものすごく大きい。舞台照明は調光の段階で消えてしまうなどまだ課題があるが、今後は切り替わっていくことになることは十分に考えられる。

岡崎委員長

- ・ ソーラーパネルをつけると世界遺産のリストから外されたりするのだろうか。

橋本委員

- ・ それは分からない。世界遺産を判断する人がどう考えているかによる。
むしろ設備関係についてはこれからどんどん変わっていき、建物の中で最も経年劣化が激しい部分なので、どんどん変えていくことができる機構にしていけないといけないし、機械室の搬出入もその辺りを考慮していく必要がある。色々な意味で設備関係は10年程度で変えていくことができ、日常点検もしやすい建築づくりは改修で絶対に必要になってくる。
今の事務所建築などでは簡単にパイプスペースを壊さずシャフトをユニット単位で変えることができるようになってきているので、使いやすいものにしていく必要がある。
- ・ 「建物は使ってなんぼ」という言い方はおかしいかも知れないが、使いやすい建物をつく

ることは建物の寿命を長くし、建物をみんなが使い、運営者が使いやすい建物はサービスも行き届くと考えている。

いくら利用者のニーズに応えても運営者が我慢して使わなければならない建物は、いずれくたびれてくる。問題は建物の価値をどこによって立つか、ここの違いで変わってくる。すごく不便でも不便を楽しむということもあるので、京都会館の立ち位置をどういったポジションとしていくかが大事であり、あらゆる点において共通の大きな合意を保てるようなことができるかと思う。古くても使いやすいことばかりでなくてもいいということにもなるかもしれないが難しい問題だと思う。

岡崎委員長

- ・ 結論は今日の議論では出ていない。

衛藤委員からあった「こんな資料がほしい」とか今の状況で詰め込んでいくと2000人が収容できるといった想定案を仮のたたき台とした資料を作製し、次回に提出していただくことは可能か。

事務局（平家都市計画局公共建築部長）

- ・ 詳細なものではないが、議論が深まるような資料については、どのようなものができるか検討する。

中川委員

- ・ 具体的な計画案が少しでも分かるようなものがあると議論が深まると思う。

岡崎委員長

- ・ 抽象的な基本的考え方の議論をすることは大切である。しかし、具体的な資料もあった方が良く思うので、よろしく願いしたいが事務局としてどうか。

事務局（平家都市計画局公共建築部長）

- ・ 御議論をいただいた点を事務局で整理し、次回の議論が深まるように資料も用意したいと考えている。
- ・ 今日、議論を聞かせていただき、京都会館を市民の皆様に喜んでいただけるようにするにはどのような知恵を出せばいいかという観点で、たくさんの御意見をいただいた。
今後も皆様のお知恵を借りながら、衛藤委員がおっしゃった総合力で取り組んでいきたい。委員の皆様と連携し、事務局も一生懸命頑張っていく決意である。

岡崎委員長

- ・ 簡単な議事録について、各委員の御意見をまとめたものの提出は可能か

事務局（平家都市計画局公共建築部長）

- ・ 第1回目の委員会の御意見は、資料としてまとめて提出する。

事務局（内山文化市民局文化芸術都市推進室長）

- ・ 今後、委員会で検討を進めていただくに当たっては、京都市が本年6月に策定した再整備基本計画に基づいてデザイン等の御検討をいただくことになるが、この基本計画の策定に当たっては、平成14年から約9年間にわたって様々な市民の皆様や利用者の御意見を反映し、まとめ上げたものである。
そういう意味では、多くの方々の大きな要望があったと考えている。
色々な御意見を伺っている中で、多くの方々から圧倒的に賛成していただいていることは、我々としても意を強くしているところである。
- ・ ただし、委員の御意見にもあったように、市民の認識の中には、誤った認識を持っておられる方もおられる。そういった点については、今後、市民の方々にきっちりと周知をしていきながら、再整備基本計画に基づいて京都会館の再整備を進めて参りたい。
- ・ 基本計画の案をつくり、本市からローム株式会社に基本計画をお示したうえで、命名権の契約締結に至った経過がある。
再整備内容について具体の要望はいただいているので、この点については誤解のないようをお願いしたい。
- ・ 次回の委員会は、11月中旬を目途に日程調整を行う。

(6) 閉会

以 上